校友時報

平成元年7月21日
編集人兼発行人
秋田県能代市高瑞2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

第30回 能高祭

見たか！われらの心意気

若さ大爆発!!

第三十回能高祭が「PRESST O～至上の律動～」をテーマに、今月七日の前夜祭を皮切りに三日間に渡って開催された。

昭和三十五年に第一回が開催された能高祭も今年で三十周年に当たるため、新しい企画が考案されるなど、約一週間という短い準備期間に実行委員をはじめとして真剣に取り組んでいた。

ことに能高祭のしめくくりである後夜祭はファイヤーストームを囲んで、恒例のフォークダンスに生徒全員が「燃えつきた」という印象を与えるほどの盛りあがりを見せた。

HRデコの類型化、校内の清掃、実行委員会と各部門の連携の不十分さなど残された問題はあるにしても、多くの生徒にとっては十分満足のいく能高祭だったようだ。

なお、各部門の審査の結果は次の通りである。

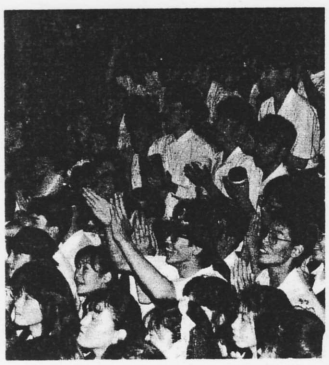
▼総合成績
優勝　三C
準優勝　三D・三F

▼HRデコ
最優秀賞　三G
優秀賞　男と女の（熱い）夏の物語（ストーリー）　三F
THE BON-ODORI　三F
優良賞　三C
ピントにつよく色がいい　三C
審査員特別賞　二A
セミナーハウスの手伝い
新人賞　一B
おじいやしき

▼壁新聞
金賞　三D「維新」
銀賞　三C「翠華」
〃　一C「一徹」
銅賞　三E「蒼天」
〃　三F「紫苑」
〃　二C「玲瓏」
新人賞　一G「珊瑚」

▼のど自慢
最優秀賞　三D
Diamonds
優秀賞　三C
渚のはいから人魚
審査員特別賞　二F
恋のダイヤル6700
新人賞　一C
君はファンキー
モンキーベイビー

▼仮装
最優秀賞　二F
あしたのジョーと力石徹戦
優秀賞　二G　たる
優良賞　三F　教師結婚物語
審査員特別賞　一A　とんぼ
新人賞　一F　ポパイ


ステージを見つめる熱い視線

一緒に新聞を作りませんか

能高祭壁新聞部門へのご協力ありがとうございました。すばらしい新聞ばかりでした。才能に恵まれた皆さん、一緒に「校友時報」を作りませんか。新入部員を募集します。

雨天体育館建設へ

十月末には完成予定

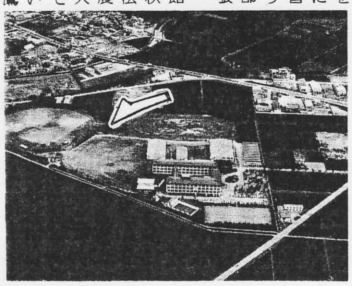
雨天体育館の建設工事が六月二十日から始まった。今年三月には設計がまとまり、四月二十四日に開かれた教育振興会総会で建設が決まっていたものである。工事は、八千八百九十九万二千円（消費税込み）で、中田建設が落札、今秋十月末には完成予定である。

雨天体育館建設は、野球部をはじめとする屋外運動部が冬期間などになると、校舎内の廊下をランニングしたりウェートトレーニングだけになるなど、満足な練習ができないでいたこと、また六十五分授業の導入により、体育の授業が三クラス同時に行われるため、雨天時の体育館使用に支障をきたすことなどから浮かび上がった。

計画によると、雨天体育館は、硬式野球部練習グラウンドと陸上トラックの中間の松林の位置に建設される。全体面積約三〇m×四〇mの千二百㎡の鉄骨造りとなっている。また、土のグラウンド部分は、三〇m×三十五m、野球のダイヤモンドがゆっくり入る広さとなる。

昨年十二月には、関係者は雨天体育館をもつ県内外の各高校を視察、能代の場合は屋根が塩害で傷まないようにする配慮や、強風対策として換気扇を側面に取り付けるなど、そこで得た情報を生かした設計となっている。この他、施設内に更衣室とトレーニングルーム、トイレを備え、内部には野球の練習ができるよう側面と天井部にネットを張りめぐらす。

雨天体育館は、すでに秋田、秋田経法大付、金足農業、横手、大館鳳鳴などで建設されている。他に、鷹巣農林が今年建設する予定で、能代山本では初めてとなる。


雨天体育館の建設位置（矢印）

行くぞ甲子園

秋田大会始まる

あす十和田高校と対戦

第七十一回全国高校野球選手権秋田大会は、四十九校が参加して十九日開幕、甲子園出場をかけて熱戦を繰り広げている。

組み合わせによると、本校は水林球場で二十二日午前十時から、きのう大館鳳鳴高校に勝った十和田高校と対戦する。

主戦、本格派の高橋、安田、二年生の二枚、成田という層の厚い投手陣と、四番の児玉を軸とした切れ目のない打線をもった今年の本校硬式野球部は、投打の歯車がうまくかみ合った試合展開で春季全県大会優勝、東北大会で準優勝というすばらしい成績を残している。今大会でも、本林球場ブロックには中央の実力校が入らなかっただけに恵まれた組み合わせで、上位進出の可能性が大きい。

尾形監督に大会前にお話をうかがった。

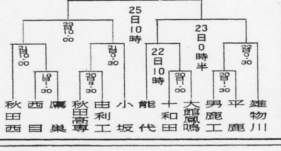
「東北大会後のけが人も全快し、今のチームの状態は絶好調。初戦の対戦相手はどちらが上がってくるかわからないが、どちらが来ても大丈夫。一戦一戦を全力で戦う」

大会開幕と同時に二十七歳の誕生日を迎えた監督にとっては、就任三年目で真価が問われる大会となるが、とても心強い言葉を述べてくださった。

本校はこれまで昭和三十八年、五十二年、五十三年の三回甲子園出場を果たしている。戦力からみると、十一年ぶりの四回目の甲子園出場も手の届くところにあり、V争いの有力な一角とされている。

もはや、甲子園は部員だけでなく全校生徒一人一人の夢である。全校が一丸となって、本校チームの活躍を期待している。頑張れ、野球部。

水林球場の組み合わせ



65分授業

生徒の64%が歓迎

予習・復習は厳しく

今年度から始まった六十五分授業も第一期定期考査を終え、少しずつ根を下ろしてきた。

導入当初は、生徒の間だけでなく先生達にも長く感じられていたようだったが最近は次第になれてきている。しかし、当初先生方から注意された、予習、復習の励行という点ではまだまだ六十分というのが先生方の指摘である。また授業の進度が早くなり、一時限で学ぶ範囲が広くなるため、授業を一コマ欠課するととり返すのが容易でないようだ。

いろいろ伺ってみると、先生方は一時間内にまとまった指導ができる「一時間内に基本の指導から練習問題までつないでいける」など好印象をもって受けとられているようだ。また「指導法の工夫をして、単調な六十分にならないようにしたい」という反省を持っている先生もおられる。

先日の能高祭で行われた壁新聞コンクールでも六つのクラスで六十五分授業に関する記事を載せていた。

三年D組では、全校を対象にアンケートを行っていた。これによると三カ月以上たった今も「六十五分授業は長い」と感じている生徒が八割を超え、未だ順応できていないことがわかる。

また、三年C組はクラスを対象に「六十五分五時限授業と五十分六時限授業とではどちらがいいと思うか」という調査をしている。この結果は三Dとほぼ同じで六割強が六十五分五時限の方が良いとでている。これは、一日五時限になると、家庭での予習の教科数が減り一つの教科に集中できる、心に余裕をもつことができるというのが三Cの分析である。

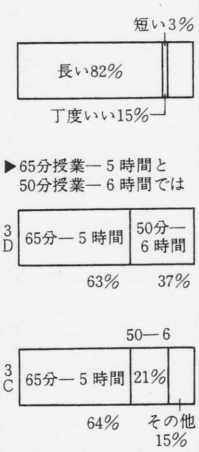
二年B組では、第一期考査直後に来校した教育実習生に話を聞いて、六十五分授業と五十分授業の比較をしていた。

六十五分授業の長所としては、嶋田真紀子教生は「一つの科目をじっくり教えることができる」と語っていた。

六十五分授業の学校生活全体への影響についてとりあげた壁新聞はなかったが、部活の人や、汽車通学者には多少の影響があるようだ。また、昼食の時間も変わり、二校時の休み時間は短くて食べられない。そのため昼休みまで何も食べないとおなかがすくという声もある。

「もう慣れた」といいきれない現在だが、それぞれの将来や進路を考えると、どうしても成果をあげる必要がある。

顧問の中田先生は、「四月から三カ月かけて準備をしてきた。また、第一期定期考査の後は合宿を行い、生徒達は観客に喜んでもらえるように一丸となって頑張った。これからはコンクールに向けて、頑張っていきたい」と語ってくれた。



文化部の活躍

一学期は、運動部の各種大会と同様、文化活動も盛んに行われた。

「ゲーム」を上演

春季演劇発表会

六月四日、二ツ井町福祉会館で春季演劇発表会が行われた。

この発表会には、本校の他、能代北、能代工業、二ツ井高校が参加した。コンクールではなく練習成果を発表し合う会というとって各校ともものびのびと演技をしていた。本校は福田薫作の「ゲーム」を上演して好評だった。

最優秀賞を受ける

放送部の番組制作

県教育委員会など主催の第三十回県高校放送コンテストが六月二十一、二十二日の両日、秋田市文化会館で行われた。

コンテストは各部門に分かれて行われたが、ラジオ番組制作課題で本校の「HOW TO いねむりことわざの話」が最優秀賞に選ばれた。

今月二十七日から三日間、東京で開かれる第三十六回全国放送コンテストに出場する。

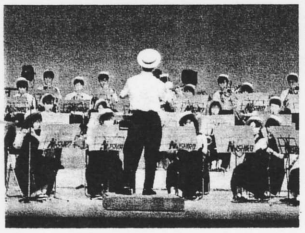
感動のうちに閉幕

吹奏楽部演奏会

七月一日、能代市文化会館で本校の第二十七回定期演奏会が開かれた。

昼の部、夜の部が行われたが、観客も千人ちょっと上々。日頃の練習の成果を十分に披露し、聴衆を魅了する演奏だった。

四部で構成され「TRUTH」「音楽祭のプレリュード」、「Magic Flea」などの曲を演奏。最後には、本校吹奏楽部のテーマ曲である「栄光への脱出」で、感動のうちに幕を閉じた。


演奏にも熱がこもる

全県研修会に参加

新聞部

新聞部は、六月二十三、二十四日に秋田市青年の家で行われた高文連の生徒リーダー研修会に参加した。

この研修会では、新聞制作のための特集の取り上げ方や割りつけの基本などの講習を受けた。県内各高校から集まった百人ほどの新聞部員たちは、真剣な表情であった。また、レクリエーションや各校の実情交流なども行われ、お互いに交流を深めた。

研修会に参加した小林さんは、「いろいろな学校が参加して、他校が私達より真剣に活動していることを痛感した」と言っている。